

④『なぜ民主主義を世界に広げるのか』

圧制とテロに打ち勝つ「自由」の力

ナタン・シャランスキー著

The Power of Freedom to Overcome Tyranny & Terror・・・僭主政治
と恐怖に打ち勝つ「自由」の力

研究会 レジュメ 2007. 6.23 石積勝

序章「自由」には世界を変える力があるか

- * 反体制派は理解していた自由の力
- * アンドレイ・アマルリク『ソ連は1984年まで生きのびるか』1970
- * すべての国の人が自由を望んでいると、私は確信している。どの国においてであれ、自由が広がることは、世界のあらゆる国をより安全にすると確信している。さらにアメリカをリーダーとする民主主義諸国は、世界に自由を広める上で重要な役割を果たすと確信している。P39
- * 世界は再び悪と対決する覚悟のある人々と、悪と宥和しようとする人々に分かれている。二つの陣営を分かち問いは「自由には世界を変える力がある」と信じているか否か」である。
- * 民主主義を広めることが何故必要なのか、そしてそれが可能だと何故いえるのかを(本書で)説明しよう。P40

第一章 すべての人が自由を求めているのか

- * 「われわれの価値観は西洋の価値観ではない。人間精神の普遍的な価値観だ。・・・選択のチャンスを与えられたら、選ぶのは・・・圧制ではなく自由、独裁ではなく民主主義、秘密警察の支配ではなく法の支配である。」(2003年夏、於米議会ブレアー演説)
- * 「自由はアメリカが世界に与える贈り物ではなく、神が人類に授けた賜物である」(ブッシュ)
- * アメリカ政府が自国の国土に対する攻撃(9.11)に違った形で対応していたら、＜中東の民主化は可能か＞という問いは、恐らく大学の象牙の塔のごとく、少数のシンクタンクのレクチャーホールに任されたままになってい

ただろう。

*この戦争は「世界を脅かす、すべてのテロリスト・グループが見つげ出され、阻止され、叩き潰されるまで」続くと、ブッシュ大統領は宣言。P43
＜二つの戦略＞

①国家によるテロ支援に終止符

②テロを支援している体制を民主的政府と交代させる・・・内政干渉への大胆な転換・・・テロは何よりも民主主義の欠如から来る。

③について希望を持てる歴史がある ヨーロッパを越えて、ロシア、日本

*日本のケース：著者は説得的であると考える。

*中東では無理という議論：

「中東の人々は圧制の中で暮らすように運命図けられているかもしれないではないか。」

「民主主義は中東に根を下ろすことはできないのかもしれないのではないか。」

「民主主義では人間が法律を作るが、イスラム教ではモハメッドに口授された神の法、改正することができない法がコーランに記されており、それが多くの人をイスラム教は民主的統治とは相容れないという結論に導いている」（『ザ・エコノミスト』P55）

9条は神に近づいた人物が作った法だ。

*かつて西洋的価値観の洗礼を受けた国々では民主主義のチャンスがあるかもしれないが、中東には他の地域では先細りになった反民主的特質が、はるかにしぶとく残っているといえるのである。世界でもっとも抑圧的な体制は中東に集まっている。

第二章 自由社会と恐怖社会

*「自由とは何か」についての鉄格子の中の一致：社会が自由であるとは、逮捕や投獄や身体的危害の恐れなしに自分の考えを表明する権利が、人々に保障されていること。

自由の名による戦争で自国の自由、アメリカの自由は一体どうなったのかこれが問われる。

*町の広場テスト；町の広場の真ん中に進み出て逮捕や投獄や身体的危害の

心配なしに自分の意見を発表できるか。

そもそも広場ない場合はどうなるか。今日の日本は自由からますます遠くなる。著者には是非日本の現状を診てほしいところだ。

*「自由」の定義を満たす社会が必ずしもすべて公正ではない。しかし恐怖社会は例外なく不正正だ。

*世界は自由社会と恐怖社会の二つに分かれ中間には何も残らない。体制批判の権利を守らない社会は、必然的に恐怖に依拠することになるからだ。圧制の力学がこれを不可避にするから。

例えば日本は中間に位置すると石積はまずは考えたのだが、日本の現実を見て著者はなんと言うか。

<恐怖社会に広がる「二重思考」>

*体制批判が禁じられているところでは社会は三つのグループに分かれる。

①賛同するもの②公然と反逆するもの③自分の考えていることを表に出さないもの・・・批判に伴うリスクを恐れている人々・・・二重思考者

*ガンジーが立ち向かったのは帝国主義的ではあったが、自由で民主的でもあったイギリス社会だった。ヒットラー・スターリンに対する戦いだったら彼の戦いは始まる前に終わっていた。

*サウジアラビアにどれだけ二重思考が広がっていることか。石積同意

*中東のもっとも反米的な体制の国民がもっとも親米的である・・・思想教育の限界

「ソ連を思い出しましたよ。(イランでは)役人はみんなアメリカを悪くいい、国民はみんなアメリカ大好きなんですから」

第三章 圧政を支えるもの

*圧制からの自由は万人が望んでいるだけでなく、万人にとって望ましいものでもある。しかし残念ながら、政策決定者は概してそうは思わない。

著者は真面目である。究極のデモクラットである。共鳴できる。新左翼・全共闘である。

*民主主義より安定が大事

*自由世界の中にさえ、安定の擁護者は民主主義の擁護者の何倍も存在する。

世界の民主主義の政府は、左派も右派もほぼ例外なく、自分たちの知っている非民主的体制のほうが、知らない民主主義より良いと考える。

- * 道徳の推進と利益の推進のどちらかを選べといわれたら、民主主義国はほぼ例外なく後者を選ぶ。

<利益と道徳>

- * 外交には道徳的理念の入る余地はないと考えてきた人達・・・主流の国際間理論・・・モーゲンソー、ケナン、キッシンジャー・・・現実主義＝戦略的利益だけを基に政策の分析策定を行う。
- * 分別ある政治化がなすべきこと＝自国の利益を高める国際秩序を発展させること。国内では決して放棄しない理念を無視することが必要になるにしても・・・といわれてきた
- * クインシー・アダムズ「すべての人の自由と独立をひたすら願う」が、「自国の自由と独立のためにのみ戦う」

- * 自由なくして民主主義はない・・・選挙分岐点・・・町の広場テストに合格していれば
- * ヒットラーを破ってドイツを占領したアメリカその他の連合軍は、ドイツの連邦占拠を賢明にも4年間は実施しないことにした。アフガンやイラクで民主主義社会を築く手助けをしたいと思っているものたちが肝に銘じておくべきことだ。ここは重要：問題は選挙そのものではない。自由社会の制度と空気だ
- * 我々はパレスチナ人の二重思考に惑わされないようにする必要がある。体制にたてつくことが許されず何十万もの人々が体制に結びつくことで暮らしを立てているパレスチナ社会では、ユダヤ人国家に対する戦いで死ぬ覚悟を表明することが、残念ながら広くはびこっている。P95
- * 民主主義国では政治指導者の個人的利益が——もっとも欲得ずく政治指導者の場合でさえ——彼らの統治する人々の生活を向上させることと効果的に結び付けられている。平和と繁栄をもたらしていると認知された指導者は再選される傾向にあるが、そうでない指導者は政権を追われることになりがちだ。

大学における民主主義とは何か。統治の対象の中身が問題。大学の民主主義は教授会の自治である。しかし實際上統治される対象はじつは学生である。そこには民主主義は存在しない。

- * 民主主義国同士が戦争することを防いでいる決定的な要因は、民主主義国の国民に特有な価値観ではなく、むしろ民主主義国の政府の権力が究極的には国民の意志に依拠しているという事実なのだ。二つの民主主義国が紛争に発展しかねない問題に直面したとき両国の指導者は——彼らの権力は戦争を最後の手段とみなす市民に依拠しているのだから——戦争を回避して妥協に至るために、あらゆる手を尽くすことだろう。
- * 恐怖社会では、支配所の利益と被支配者の利益を一致させるメカニズムが崩壊する。独裁者は国民に依拠しておらず、国民が彼らに依拠している。
- * カストロ・北朝鮮＝重要なのは国民生活の改善ではなく国民を管理すること。

<独裁者の下で平和はない>

- * 民主主義の力学が民主主義を生来平和的な国にするのに対して、圧制の力学は非民主主義国を、生来、好戦的な国にする。外敵
- * 友好的な独裁者という概念は絵空事だ。

第四章 自由世界が行使できる力

- * 「イラクの人々は独裁者の前に跪いて暮らすのではなく、もっと良い人生を送る権利がある。イラクの人々は、自由な人間として——自由な国の市民として生きる権利がある。」
プッシュのこの話は、戦争にしばしばともなう美辞麗句に過ぎないと片付けられていたかもしれない。しかし、これはリップサービスではなかったと明確になる。
- * この先数年でイラクに民主主義が根付く公算は、それがどれほど小さかろうと、シリアやサウジで民主主義が根付く公算よりは大きいことを、恐らく殆んどの人が認めるだろう。
- * イラク>アラブ>北朝鮮・中国・・・民主主義可能性の比較
この著者の見方について研究会メンバーはどのように反応するだろうか？聞いてみたい点である

<恐怖社会はどのようにして崩壊を回避するか>

- * 恐怖社会は永久に管理し続けることはできない。
- * サハロフ：「知的自由を制限し、考えの自由な交換を妨げる社会は、国民

の創造の才を自由に解き放つ社会には太刀打ちできない。」

- * ソ連の進歩は幻想だ。・・・アメリカが作った滑らかな滑走路の上をアメリカよりずいぶん少ない力で進むことができるのだ。最先端分野で世界の先頭を走ることで、アメリカの自由社会は深い雪をかきわけながら進んでいる。ソ連の自由の欠如はこの国に、他人の努力の成果を利用して前進できても、独力で進むことはできない二番手の地位をあてがうことになる。
- * 厳しい管理は必然的に衰退のプロセス誘発する。
- * 工業化と大量生産の時代だったので、他国で完成された手法をソ連の統制経済の中で使うこともできた。だが、技術進歩がアイディアの自由な流れにますます左右される情報化時代には、ソ連の硬直化した恐怖社会は西側にますます遅れを取るように運命付けられていた。

このあたりの議論は我々にまた別の問題を想起させる。つまり日本の問題である。日本の成功は<追いつけ追い越せ>までであった。<自ら深い雪をかきわけ>ながら進んでいないという問題である。それに伴う日本の脆弱さである。

- * サウジ;石油のおかげで隠されてきたが、恐怖社会の崩壊が始まっている。

<レーガンの挑戦>

- * アメリカは自由社会・自由市場の利点を生かして冷戦に勝利すると宣言。「西側は共産主義を封じ込めるのではない。それを超越するのだ」(レーガン) 経済基盤にもはや対応していない政治構造。生産勢力が政治勢力に阻まれている社会。P145
- * 「レーガンの防衛力増強がなかったとしたら、アメリカが自由のために戦う用意があるだけでなく、自由を守るために巨額の資金を投じる用意もあるということを見せつけなかったとしたら、我々は恐らく今日ここに座ってロシア人とアメリカ人の自由な議論に参加してはいないだろう。」原注 26
- * ソ連に対するレーガンの挑戦は、経済的な挑戦であると同時に道徳的な挑戦でもあった。だからこそ彼の政策はソ連の反体制者の生活に劇的な影響を与えた。

9条はまさに、世界に対する道徳的挑戦である。アメリカの政治主義を越える政治主義なしに9条は維持できない。9条はもはや日本人の視点からは論じられない。アメリカ的視点、リベラルアメリカの視点から論じたほうが良い

かもしれない。9条問題を全く違う角度から切り開く時が来たのかもしれない。・・・9条については後述する。

第五章 ヘルシンキからオスロへ・・・ここは完全に省略

第六章 明確な道徳性を求める闘争

- *1986年イスラエル到着時。イスラエルの支配下にあるパレスチナ人は自分の考えをそのまま口にできるか
- 彼らは自分の意見を発表できるか
- 彼らは自分の信仰を実践できるか
- 彼らは自分たちの歴史と文化を学ぶことができるか

*答えはすべてイエス

<戦時下の民主主義国>

- *人権問題は背景・状況を抜きにしては絶対に判断できないものだということを、私はよく知っていた。恐怖社会では制度全体が人権侵害だった。だが、自由社会では、他の権利を守るために一部の権利を放棄せざるを得ない状況が存在するのである。P214 ここをどう考えるかである

- *人権の中でもっとも大切な権利——他のすべての権利の行使を可能にするこの権利を守ることは、政府の最も重要な責務である。

- *原則として行政拘禁は絶対に正当化できないと主張することは私には無理な相談だ。

自由社会と恐怖社会を区別せずに人権擁護の活動を行っている人達は、善悪を見分ける羅針盤をなくしてしまうだろう。

これらの主張はかなり微妙であるしかし著者の立場を理解するためには重要

- *パレスチナのテロ攻撃とイスラエルの対テロ作戦は道徳的に等価ではない。パレスチナのテロリストは意図的に民間人を標的にしている。イスラエルの軍事作戦が意図せずして罪のない民間人を傷つけることがあるのは確かだが、イスラエルは絶対に民間人を標的にはしない。標的にするのはテロリストだ。P217

第七章 失われたチャンス 省略

終章 世界中を民主化せよ

* 自由世界の民主勢力は、今日、アラブ諸国の体制が自国民をどのように扱っているについて、ほとんど沈黙している。アラブ世界内部の人権に対する彼らの関心は、かつてソ連国内の人権という大儀を支持したときの熱心さの足元にも及ばない。だが、アラブの反体制活動に対する指示がない中でも、自由を求めるアラブの声は次第に大きくなっているのである。

これをどう考えるかは、大きなポイントだ

* 自由世界は独裁体制が改革に同意するのを待ってはいけいけい……我々は彼らの反対を乗り越えて、前進する勇氣を持たなければならないのだ。我々は国際機関の支援も待ってはいけいけい。国際機関で影響力を振るっている国の多くが、非民主的な体制の国だ。自国の国民に自由を認めていない者たちに、世界に自由を拡大する活動を支援することなど、期待できようはずがない。……だが、圧制には終りがあると信じている。……奴隷制度が地上からほぼ抹殺されたように……

* 国民に意見を表明する権利と決定に参加する権利を与えている政府——世界各地で民主主義を守り、推進するために、そうした政府だけが、意見表明の権利と参加権を持つ、新しい国際機関が設立されれば、それは民主的改革を促す極めて重要な勢力なりうるだろう。……

何故本書に興味を持ったか

1) 直接には前回の山本氏の報告に起因する。配布された資料の中でもっとも面白い資料であった。今回、全編を読んだわけだが、私の、あるいは私たちの問題意識からすると、やはり配布資料部分が中心となろう。山本氏は的確に重要な章を選んでくれたと思う。

2) 以前から、ネオコンの論理が単なる保守反動の論理ではなく、むしろアメリカで言えば急進的民主党グループ、あるいは(新)左翼だった切れ者たちによって支えられているという点は気になっていたし、それがどうゆう言説であったのかについては一度確かめておきたかったということが、大きな背景にあって、この本を選んだ。読後感でいえば、かなりの確に私の興味・関心に答えてくれている著書であった。

本書の読後感・・・宮台の解説を出発点に

1) 本書の要約は宮台真司の解説が的確だ

「ネオコンを支える考え方や感受性は必ずしも間違っていないじゃないか、と思われた方々も少ないのではないだろうか」という宮台の指摘は、その通りだと思う。石積もそう感じた。ネオコンは一体何を考えているのか、ということについて、あまりにラベル張りのネオコン論が横行していると、前々から感じていたが、本書を読み、以前にもまして、一刀両断に、気楽にネオコン的なものを切り捨てるわけにはいかない、と感じている。本書は二刷りが出ていないようだが、もっと真剣に検討されて良い本だと思う。書齋で自由・民主主義を議論しているだけでは済まされない、現場の真っ只中の人間だからこそその切迫性を抱え込んだ議論が重要だ。激情に流されているわけでもなく、著者は論理を失っているわけでもない。貴重な問題提起ではないか。

本書については、宮台が強引に一ページで要約しているが(293-294)、石積としては宮台の纏め方に異論はない。そういう意味では今回のレポートは宮台の纏めから入っても良いくらいだ。

2) 相対主義を拒否するシャランスキー・宮台

「フセイン打倒はイラクの開放だった」というシャランスキー・宮台は自らの立場を明確にしている。本書和文は2005年6月出版だが二年後の今、それぞれがどのような立場を取るか聞いてみたいところだが、現在においても恐らくそう主張するだろう。宮台が紹介するケン・ジョセフの話は面白い。イラクでのテロは報奨金目当てだと指摘し、現実主義というお題目での非人道主義に怒るのがケン・ジョセフだ。宮台は「ネオコンをく反人道主義的な現実主義者」と見るのは間違いだ。むしろそれはネオコンがデタント派的なリベラルに向ける批判だ」という。この批判はわかる。本書を通読して、さらに明確にその点はわかる。ブッシュ政権の構成がオールド・ライト(反共&自国中心)+宗教的ライト(中絶反対)+ニュー・ライト(人道国際介入主義)の三者構成であるというというもの、なかなか鋭い。・・・もっともこの指摘はどこかで誰かがしている可能性大だが。

3) シャランスキーも宮台も「多文化主義者 in 近代社会」を倫理的頹廃とみる

多文化主義者は宮台の言うように、確かに、「近代社会」を前近代社会と同格に置き、「様々にありうる社会のひとつ」とする。宮台が言うように、多文化主義は近代の押し付けを嫌う左翼源流の立場で、日米ともにアカデミズムを席卷している。この点もわかる。(宮台は日米というが、石積の見立てでは特に日本のアカデミズムがそうだ)。

宮台の言う<オータナティブの近代>を構想する<アジア主義>や<欧州主義>の中身はわからないが、——残念ながら今回そのことについて書いている宮台の本を読む余裕がなかった——私(石積)もまた宮台と同様に、オータナティブの近代にコミットしている。その意味では<多文化主義者>ではない。ここはきっちりとこの研究会でも議論すべきところだろう。多文化主義ではなく文化的多元主義が宮台のとり立場だが、それは[近代と両立する限りで多様性を許容し、高度に両立不能な要素を消去しようとする]ものだという。私(石積)もこの文化的多元主義の立場に与する。

4) 現実のネオコンは明澄でない

この宮台の解説に同意する。「敵の敵は味方」の論理で、ネオコンはそれを政権内でやってしまったという指摘は正しい。ネオコン政策が中国に適用されないのも問題だと指摘も正しい。ネオコンの弱点の第三が文脈への鈍感さであるということについても同意する。

宮台はその様に指摘した上で、最後に「結局、本書に示されたネオコン的な理想主義も、現実にはブッシュ政権での役割に注目する限り、ご都合主義的機能しか果たしておらず、道徳的な明澄さから程遠い。その意味で話半分に読まれる必要はあるが、出発点の理想や感受性が誤りかどうかはまた別問題である。」と述べる。熱烈支持の解説が一転してジェットコースターから突き落とされたような気分になる。なんとも歯切れの悪い解説で終わっている。その歯切れの悪さを補うべく解説のタイトルは「今日のネオコンを<本義を貫徹せざる者>として批判するべし」とはなっているのだが・・・・

本書に触発され私の中で生まれつつある考え

1) 本書を通読し、改めて自分は近代主義者なのだと再確認した。

特に「自由の普遍」についてはシャランスキーの言説にほぼ同意する自分がいた。宮台に負けず劣らず石積は近代主義者なのではないかと思う。研究会メンバーの、皆さんと是非議論したい。

以前から文化相対主義に大きな疑問を持っていたのだが、改めてこの問題を考えざるを得ない。もともと文化相対主義の問題を考え出したのは、ルールベネデクトの『菊と刀』そしてその『菊と刀』に痛烈な批判を浴びせた『<菊と刀>再考』(ダグラス・ラミス)を読んでからだ。リベラルな文化相対主義者であるはずのベネデクトが、なぜ日本文化を「死んだ文化」として扱い、したがって見事に類型化しきることができたのかという問題は、実はこの「文化相対主義(多文化主義) VS 文化的多元主義」の問題であろう。

もっとも文化相対主義に対する違和感は、本を読んでもか、学問的にとかというよりは、もっと体験にもとづいているものである。例えば米国で日々生活している中で、それこそ日々、日米を比較する中で、その時その時で価値判断はついて回る。安易に「どちらも良いところがある」などと言ってお茶を濁すわけにはいかないのである。実務家であればなおさらそうした決断に毎日晒される。

いずれにせよ石積にとって「自由」はほとんど信仰にも似た物になっていると思う。

自由の普遍化・神島元理表・自治元理について

2) われわれは能動的に「自由の普遍化」を進めなければならない

人類の歴史は自由獲得への歴史であったと私は考える。そしてそのことはこれからも続く。この流れを後退させてはならない。もちろんその大前提として生存権がある。生存権を奪うこと(戦争はそうだ)は自由獲得の一番の基礎を奪取することだから「自由のための戦争」という言葉には相当な

矛盾がある。とくに「自由の普遍化」(自由のグローバリゼーション)が例えばシャランスキーなどの中心的テーゼであるわけだから、その普遍化は本当に武力即ち戦争という手段によってしか達成できないのかどうかについては、透徹した抑制志向が要請されるはずだ。「自由の普遍化」を誰よりも強烈に信じている者であれば誰よりも戦争に抑制的にならなければならないはずである。

我々が「自由の普遍化」を求めるということはどういうことか。それは武力行使の否定、ないしは徹底的な抑制の<制度と空気>、あるいは<論理と心理>を流布し啓蒙することではなければならない。神島元理表の話に関わるが、自由(あるいは自治)と支配の元理のワンセット発想からの脱出は、「自由の普遍化」主義者であればあるほど、希求されなければならない。

3) イラクやアフガンやその他を民主化しようとすることは決して間違いではない。

問題はその手段である。自治元理はもっともっと広められるべきだ。その手段としての支配元理の行使が問題である。そのことを明確に意識すべし。ここで石積は明確に<文化相対主義>あるいは<多文化主義>に別れを告げる。自治の元理こそが神島が抽出した10の元理の中で価値的に重要であり、人類史を普遍的に貫かねばならないものであると石積は考える。その意味では石積はやはり日本社会史の文脈では<戦後民主主義>(自治の元理を基礎にした自由・平等の価値の共有と制度化)者である。<戦後民主主義の空洞化>に危機感を抱くことにおいて人後に落ちないと自負するが、それは自治の元理に対する強烈な価値判断があつてのことである。

4) 「ネオコンは明澄ではない」と宮台は言うが、問題はそこではない。

道徳的に明澄であれば、つまり妥協を排除し支配の論理を貫徹すれば問題が解決するかといえばそうではない。ネオコンは道徳的に明澄でないのではなく、ネオコンもまた、政治の現実に対する想像力、その想像力を支える神島元理表に出会っていないということである。ネオコンの「出発点における理想や感受性」を発展させるための政治学に出会っていないということなのである。

5) 神島政治元理表の画期性とその陥穽

神島政治元理表は、社会科学が光を当て切れなかった政治の実相分析に画期的に貢献するが、その意味は次のようなことである。政治現象は森羅万象、大政治・小政治、ありとあらゆる文明・文化にあまねく存在する。その森羅万象の豊饒さに対して、それを読み解く一般理論はあまりに貧弱であった。西洋の、しかも近代の、政治的現実を読み解くことには極めて有効ではあったが、空間的に時間的に西洋近代を超えた政治的現実を読み解くことがどうしても必要である。西洋近代の範疇を超えた政治的現実をすくいあげようと試みる神島政治学は画期的である。

一方、神島政治元理表をひとつ間違えて使うと、文化相対主義の世界に入る。あの元理表の、まさしく<平面的なダイアグラムの罟>に、はまってはいけない。政治の元理の抽出なのであって、その価値判断は別の考察を要請する。神島の100のマス目が等価であるはずがない。

9・11、そして9条について

6) 9.11は主流政治学の有効性に対する挑戦でもあった。

主流政治学の想像力の限界をあぶりだしたのがこの事件の本質である。対応は自治元理か支配元理かで分かれてしまう(しまった)。テロに対して支配元理で対応しようとした結果は惨憺たるものになっているが、これは明らかに政治的現実政治の発想力が追いついていないことの現れである。

では逆に自治元理のみに依拠した場合「自由の普遍化」という<当為>に答えられないことも事実ではないか。<自由>という価値は自治の元理と最も親和性を持っているが、自治の元理は実は孤立の側面もある。モンロー主義はその典型である。アメリカ理想主義(民主主義)は実は孤立主義、不干渉と、表裏一体である。アメリカ史は実は二つの大きな時代傾向の中で推移してきた。それは

- ① 自治の理想主義・自治・自由・内向きの時代
- ② 国際的正義の理想主義・支配・武力介入の時代

であった。例えば②が色濃く出てきたベトナム介入に対して、反戦運動は

①を軸に沸き起こる。ベトナムシンドロームといわれる不干渉主義の時代を経て、9・11を契機に今度は②が登場したわけである。さらにこれに対する対抗軸として①が登場する。問題は①では「自由の普遍化」という当為に対して十分に答えられないことにある。内にこもるのではなく、しかも武力の媒介によるのではなく「自由の普遍化」を実現することが希求されているように思われるが、その方法論が見つからない。そんなところではないだろうか。イラクからの撤退の声はアメリカでも大きくなっているが、だからといって支配の政治から自治の政治でスッキリとするものでもない。シャランスキーの問題提起は残る。そのあたりは例えばアメリカ国民も実は感じている点であり、発想における閉塞を感じているはずだ。つまり本当は「このどちらでもないのだけれど、でも、見えてこない」というところだろう。

7) 「自由の普遍化」を武力の介在なしに実現する。

—————石積の目指すもの。

8) 9条帝国主義の立場に私は立つ。

上記7) を実現するものとして9条帝国主義を唱道する。世界はグローバリゼーションだが、そのことに私は必ずしも否定的ではない。弱肉強食あるいは支配のグローバリゼーションこそが問題であって、「反グローバリズム」という包括的・否定的スローガンは何の解決にもならないと私は考える。(実際、特にヨーロッパなどでは<グローバリスト>vs<アンチ・グローバリスト>という構図で政治的対立が明示的にあるが、この枠組みに私は大いに違和感を抱く。思想的怠慢ではないか)

究極的には「自由の普遍化」というグローバリズムを追求することは、価値追及、理念追及という面でこれからも有効であると考えている。問題はその方法論としての支配のあるいは武力の政治である。9条はもっぱら方法論としてのパラダイムシフトに関わる。9条自体が目的ではなく、9条の方法論で「自由の普遍化」という価値を追求する立場に私は立つ。価値・理念と同じくらい重要なのが政治プロセス、即ち方法論であるから、敢えて9条帝国主義と呼ぶ。もちろん自由の根源的基盤が生存権であるということを考えれば、<9条>と<自由>の親和性はそこに明確に発見されるはずだ。

これは文化相対主義に対する挑戦である。9条帝国主義は徹底的に支配の元理を排除し、自治の元理に依拠する。あるいはエロスの元理、互換の元理に依拠する。自治と支配の元理に席卷された政治認識からは、9条を支える論理は生まれない。丸山政治学とそのシュレーが(つまりリベラル政治学者が)9条擁護の論陣を張れないのはそこにある。

9) アメリカは自由の旗手の立場を後退させてはならない。

日本も自由の旗手の陣営に明確に加わるべきである。シャランスキー的な意味での「自由の普遍化」に参加し、いやむしろその主役になるべきである。本気で普遍化を目指そうとすれば9条的方法論を持ち込まなければならないことを、根源的に理解させる必要がある。

10) 9条帝国主義を支える論理は自治・エロス・同化・知己などなどである
お手柔らかな纏めである。